



日本の説話文学に関する研究

人文科学系・言語文化学領域

児島 啓祐

准教授 KOJIMA Keisuke

博士(文学)(総合研究大学院大学)

■研究キーワード 中世文学, 説話文学

■主な所属学会 中世文学会, 説話文学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.a566ed3f02b52079520e17560c007669.html>



研究者総覧

研究概要

私は、日本の中世や近世の

- (1)口頭で語られていた説話・物語
 - (2)口頭で語られることに擬されて書かれている説話・物語
 - (3)口頭で語られていた影響が推定される説話・物語の文体
- の3点に関心があります。

これまでは中世の説話文学を中心に研究してきました。例えば、鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』を考察したことがあります。

最近では、笑い話への関心が強くなりまして、落語家の元祖ともいわれる、安楽庵(あんらくあん)策伝(さくでん)が書いた『醒睡笑(せいすいしょう)』を楽しく読んでいます。笑い話の歴史を考えてみたいという思いから、自分なりに下手な落語を覚えて演じてみたり、面白い昔話を語ってみたりしながら、説話・物語の意味を実感として掴んでみたいと願い、試行錯誤をしています。



むかし、落語会や落語教室を行ったときの写真です。

研究のプロセス・研究事例

2つの説話文学の研究事例をご紹介します。

(1)中世の地震伝承、特に「龍神が地震を起こした」とする説に関する研究。

日本の地震を起こすと見なされた生き物の研究では、龍(中世)からナマズ(近世)へという認識上の歴史的变化が指摘されてきました。ですが、この通説には疑問があります。龍の説が、日本中世の地震観といえるほどに普遍性を持ち得ていたとは考えられないからです。実は、これまでの研究でとりあげられた貴族の日記や歴史書に見える龍の説のほとんどの事例は、占術の偶発的な判定結果であることがわかりました。龍の説は、地震占いのいろいろな説(帝釈天、火神など)の内の一説に過ぎません。龍のみが時代を代表する認識とはいえないので、これからは中世の地震観については異なる見方を提示する必要が出てきました。私は、中世の宗教やその影響を受けて作られた物語の世界で頻繁に語られた、「堅牢地神(けんろうちしん)」という仏教の大地神の影響力が重要であると考えています。

(2)『平家物語』の陰陽師に関する研究。

『平家物語』には、安倍晴明の子孫、「安倍泰親(やすちか)」という陰陽師が何度も登場し、華々しい活躍が描かれます。一方で、同時代の「時晴(ときはる)」という陰陽師は、失態を犯した姿が一度だけ、しかも泰親と対比される場面で描かれています。それでは、どうして対照的な人物像が生まれることになったのでしょうか。その理由は、陰陽師たちの熾烈な流派争いに求められます。泰親のグループと、時晴のグループはライバル関係にありました。殊に泰親のグループは、色々と説話を創り出しては口頭で語り、貴族のあいだでみずからの流派の正統性の主張と他流派の批判を繰り返していたのです。すなわち『平家物語』の陰陽師説話は、泰親グループの影響を受けていることがわかったのです。